

★★ 成果 ★★

【親子通学路安全確認活動】

- ・毎日歩いて登下校する子への親の意識が変わった。
- ・帰り道では、親子で危険箇所の見直しができた。
- ・地域住民の活動の重要性を再認識した。
- ・通学路の意外な場所が危険だと分かった。

【緊急地震速報受信システムの活用】

- ・大きい揺れが来る前に、児童生徒が瞬時に身の守り方を判断するようになった。
- ・訓練を重ねることで、教職員が近くにいなくても児童生徒が主体的に行動するようになってきた。

【停電を想定した避難訓練】

- ・普段あまり使用していないスロープを日頃から管理する重要性を再確認した。
- ・発電機の使用法を確認する機会になった。
- ・音を聞き取ることが困難な児童生徒への視覚支援の重要性を確認した。

【气象台や大学教授等の講話】

- ・親子で気象庁職員の講話を聞いて、気象庁が発する情報を意識するようになった。
- ・雷や竜巻が起こる仕組みや避難の仕方を理解できた。
- ・日本は豊かな自然に恵まれているが、災害も被るという二面性を理解した上で、自然と共存する重要性を認識した。

【ボランティア活動】

- ・被災した人たちの苦勞を知るとともに、人の役に立つことの喜びを実感することができた。
- ・地道な活動が、無駄ではないことを実感できた。
- ・社会に貢献しようという意識が芽生えた。
- ・性格が前向きになり、初めての環境においても積極的に行動できるようになった。

【事業を終えて】

- ・教職員の危機意識や対応能力の向上が見られた。
- ・防災の取組を継続していく重要性を認識できた。
- ・マンネリ化しがちであった避難訓練に対して、教職員も児童生徒も真剣に向き合うことができた。
- ・学校と地域住民や関係機関等とのつながりが強くなった。

★★ 課題 ★★

- ・教育課程への防災教育の位置付け
- ・より実効性のある防災マニュアルの作成
- ・教職員の危機意識の持続
- ・地域と一体となった避難訓練の実施
- ・保護者との連絡体制の確立
- ・市町防災担当課との連携

地震研究者（大学教授）、被災地の防災アドバイザー、関係機関等からの指導・助言

防災教育の充実について

- 自然や災害をよく理解させる。（知識・理解）（恵まれた日本の風土、自然の猛威）
- 災害時の具体的な状況を想定した対応能力を身に付けさせる。
- 他人と協力できる力を育成する。

防災マニュアル等の作成・見直しについて

- マニュアルは、担当者が一人で作成するのではなく、全職員で検討し全職員で作成する。（作りながら共通理解を図る。）
- 事前（備え）・発生時（命を守る）・事後（立て直す）の危機管理を明確にする。なかでも、事前の危機管理が重要である。
- 登下校を含む様々な場面での災害発生を想定し、避難の決断、避難のタイミング、避難後の行動について検討する。

避難訓練について

- 教職員、児童生徒が主体的に行動する。
- 様々な災害発生状況を想定する。
- 避難訓練と並行して学内外の危険箇所等を確認する。

取組を継続させることが重要

- 取組を継続し、児童生徒に言い伝えていくこと。
- 海無し県でも津波を学ぶなど様々な自然災害に触れておくこと。（いつどこでどんな災害に遭遇するか分からない！）
- 気象庁の情報を随時活用すること。

平成24年度実践的防災教育総合支援事業

児童生徒の主体的な行動の育成をめざして

我が国においては、地震・津波をはじめとする自然災害が多く発生しています。学校においては、これまでも避難訓練を定期的実施するなど、様々な防災教育が進められてきましたが、平成23年3月に発生した東日本大震災における教訓を踏まえ、実践的な防災教育を充実させることが課題となっています。この課題の解決を目指し、文部科学省は、今年度、「実践的防災教育総合支援事業」を立ち上げました。栃木県教育委員会では、文部科学省から委託を受け、県内五つの学校において、以下の三つの視点から研究を進めてまいりました。

《三つの視点》

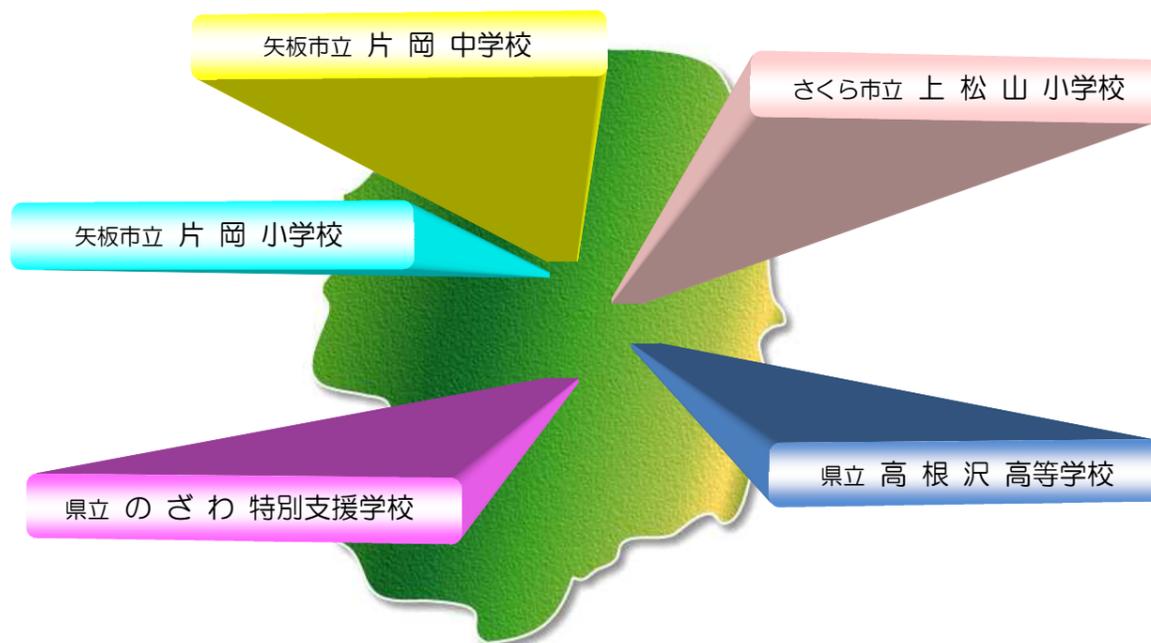
学校防災アドバイザーによる、危険等発生時対処要領や避難訓練などに対する指導・助言

児童生徒が主体的に行動する態度を育成するための教育手法や避難行動に係る指導方法の開発・普及

被災地への災害ボランティア活動等を通して、安全で安心な社会づくりに貢献する意識を高める教育手法の開発・普及

本資料は、これらの視点に立って研究した5校の取組や防災の専門家の意見等をまとめ、各学校における今後の防災教育の充実に向けての一助となることを目的として作成したものです。各学校において防災マニュアルの見直しや避難訓練・ボランティア活動等を企画する際に、御活用ください。

研究実践校



学校防災アドバイザーの活用

親子通学路安全確認活動

土曜日に親子で歩いて登校してもらい、登校中の地震を想定したそれぞれの地点における対応について、防災アドバイザーや消防署員の方等から通学路の安全確認について指導をもらったり、防災に関わる講話を行ったりした。



- 電柱の上からトランスが落ちてくる場合があります
- ブロック塀や自動販売機などが倒れる危険があります
- 崖のそばは、土砂崩れや落石の危険があります

気象庁職員、防災アドバイザーの親子防災講話

◆ 片岡小学校 ◆

マニュアルの工夫

自然災害や不審者など様々な緊急対応のポイントを一枚のシートにまとめ、生徒が認識し易くするようにした。



◆ 片岡中学校 ◆

指導方法の工夫・開発

緊急地震速報システムを利用した避難訓練

「緊急地震速報受信システム」を活用し、初期微動の間に「落ちてこない、倒れてこない」場所に身を寄せた。避難場所に集合後、地震の専門家（大学教授）の講話や保護者への引渡し訓練も行った。



地震の専門家（大学教授）による講話

保護者への引渡し訓練

◆ 上松山小学校 ◆

停電を想定した避難訓練

停電を想定し、拡声器での指示を行い、避難経路はエレベーターを使用せずにスロープとした。また、発電機の点検も行った。廊下の一角には防災コーナーを設置し、意識の高揚を図った。



スロープからの避難

廊下に設置された防災コーナー

◆ のぞわ特別支援学校 ◆

ボランティア活動

防潮林移植活動と海岸清掃活動

◆ さくら市立上松山小学校 ◆

津波で流された福島県いわき市沿岸の防潮林の再生を目的に学校農園で「クロマツ」を育て、次年度、定植を行う。また、現地に行って海岸の清掃を行った。



【児童の感想】

○来年の6年生には、元気に育てたクロマツを福島の海岸に植えてもらいたいです。
○将来、植林されたクロマツたちが、災害を少しでも軽減してくれることを願っています。

○拾ったごみは少なくとも、この活動を続けることが大きな力になると信じて、一つ一つ拾いました。
○震災以来、初めて行った福島県の様子に胸が痛み、もっと福島の人役に立ちたいと思いました。

仮設住宅の児童との交流

地域で活動しているボランティアを通じて、宮城県東松島市の仮設住宅で生活している子どもたちへクリスマスカードを届けた。



◆ 片岡小学校 ◆

東北応援ボランティア

◆ 高根沢高等学校 ◆

福祉委員会を中心として、宮城県名取市閑上さいかい市場の店頭で販売補助をした。



【生徒の感想】

○市場の人たちと会った時、最初どんな顔をしていいのかわからなかったが、何気ない会話をしていくうちに自然と笑顔が出て、今までの自分にはなかった積極的に動くことやお礼をすぐに言うことが身に付いた。[1年女子]
○「東北応援ボランティア」に参加して本当によかったと思った。被災された方々はとても明るく、逆に私たちが励まされた気がした。閑上さいかい市場の方が感謝してくれたことがとてもうれしかった。 [2年女子]
○被災した方たちの話を聞いて、自分が思っていた以上にづらい経験をしていると思った。一番大切なことは、「人とのつながり」であると教えられた。閑上中学校を訪れた時は、そこに行った人にしか分からない、言葉では言い表せないような気持ちになった。今回ボランティアに参加して、今後自分に何ができるのか、どうすべきか考えながら積極的にボランティアに参加していきたいと思った。 [3年女子]

